

芥川龍之介「羅生門」論 —— 論理の盗人、エゴイズムの盗人 ——

Ryunosuke Akutagawa's "Rashomon": Steal the Logic, Steal the Egotism

フアンユーティン
黄 郁婷

Yuting HUANG

一 論理の盗人という選択

本論考の狙いは二つある。まず、芥川龍之介の代表作「羅生門」における「盗む」という行為の意味を再検討することが第一の目的である。

「羅生門」に登場する老婆は、若い女の死体の髪を盗んでいる。そして盗みを自己弁護するための論理を口にする。従来の研究では、この老婆の論理を下人が自分が生き残るための論理として採用し、盗みを働く選択をしたという解釈が主流であった。確かに下人は老婆の着物を盗む。盗んだ以上、ここで下人は初めて盗人になったと判断するのが普通である。

しかし、下人の「盗人になる」という選択は、必ずしも「物を盗む」という意味に限定されていない。下人はまず論理を盗んだとい

えないだろうか。そこには老婆の論理を用いて、老婆を言い負かすという行為が存在している。これを老婆に対する「ブーメラン効果」と名付けておきたい。「ブーメラン効果」とは、下人が論理に隠れたエゴイズムを炙り出し、論理の持ち主をその論理の支配下に置くことである。つまり「論理の主人」を「論理の下人」へと変換させるのである。下人が物を奪うのは、「ブーメラン効果」の派生的な行為として生じていると思われる。つまり下人は実質的な物品の盗みを行う前の段階で、いわば論理の盗人、その論理を支えているエゴイズムの盗人になることを選んだといえるのである。

本論考の第二の目的は、現代読者の目にこの作品がどう映るのかという読者論を意識し、特に翻訳が広く読まれている台湾という繁体字文化圏における読者を考えるとところにある。これまでの私の研究では、繁体字文化圏という視点から考えると芥川作品が逆照射

され、新たに言葉の細部の意味が浮かび上がる可能性があることがわかつている。明治から大正、昭和にかけて、台湾は日本の一部であった。台湾には、芥川の生きた近代日本の時代感覚が、今もそのまま残されている場合が多い。本論考では、私の台湾人としての視点を活かしながら、作品を読解しようと考えている。

さて、「羅生門」の研究史を振り返ると、まず「生きんが為のエゴイズム」という問題に焦点が定められたことが確認できる。例えばそうした流れを作った吉田精一は、次のように指摘している。^①

しかし死人も生活の為に悪を冒した女であり、老婆も生きるが為に、止むなく死人の髪を抜いて鬘を作るのだときいて、彼も亦決然として引剥になつて、老婆の着衣を剥ぎとる。この下人の心理の推移を主題とし、あわせて生きんが為に、各人各様に持たざるを得ぬエゴイズムをあばいているものである。

この問題を論じる中で、三好行雄は「エゴイズムなどという概念では決して律しきれない」「暗鬱な生の風景」を指摘し、「芥川龍之介が描いてみせたのは地上的な、あるいは日常的な救済をすべて断たれた存在悪のかたちである」と指摘する。^② こうした考え方に対して、浅野洋は「下人の「餓死」は危急のリアルな現実ではなく、感傷に包まれた観念的論理の産物」だと批判している。浅野は「老婆が我が身を守るために主張した自己保身の論理」がその「内包する脆さや弱さを露呈させる」と指摘し、「下人が老婆の着衣だけを奪うのは、それが生きるための行為ではなく、同類の老婆に対する苛

立たしくも哀しい忠告だったから」と述べている。^③ 「論理」という言葉がここで頻繁に現れていることに注目したい。老婆の着衣を奪うことが忠告であったとは思えないが、下人の行為が危急のやむなき強奪だったと規定しえないという主張は首肯できる。

この下人の選択については、小谷瑛輔も「悪を懲罰して善を体现するのか、逆に自ら悪を行うのか、という語り手の整序してきた二項対立」が無効となり、「粹にはめて図式的に語ろうとする語り手の試みが、最後には失敗に終わってしまった」と指摘する。^④ 極限状況にあるはずの下人の言動やその図式に、ある種の観念性、青臭い理屈っぽさ、論理の空転や矛盾という要素が付きまとうことは、ほかにもしばしば指摘されてきた。その点は若い下人の特徴であるというよりも、語り手の「失敗」であるとみなす論も少なくない。

例えば須田千里は、下人の心理描写には欠落があり、「実は心理の転換の原因は語られていない」と指摘する。^⑤ 水洞幸夫は、「彼は生きていくために仕方なく老婆から奪う〈盗人〉を演じている」^⑥ ともと下人の中に〈盗人〉にならねばならない固有の根拠はない」と述べる。^⑥ 確かに、下人の心理転換はいささか説得力に欠けるものである。しかし、下人の盗むという行為には老婆の展開する論理がかかわっていることは間違いない。

また、付自文は「老婆の許しの倫理は、下人の一人よがりの曲解によって、他者を排除した「許し」の論理に過ぎなくな」^⑦ ったとして、倫理が論理にすり変わったと指摘する。^⑦ すでに関口安義は、「下

人の引剥という行為は、老婆の論理を取り入れたものとの解釈が成立するなら、他方で下人の行為は、老婆の論理を破砕するものであったとの解釈も可能である」として、「論理」の揺れをあぶりだしている。⁽⁸⁾

こうした研究から解るのは、いずれにせよ下人と老婆との間に「論理」のやり取りがあるという点である。この「論理」はまず老婆が脅されて怯えながら口にしたものであり、鍛え上げ磨き上げられた哲学であるとはいいがたい。その場限りの言い逃れか、仮そめの言い訳に過ぎない。要するに「目には目を、歯には歯を」の報復律を言っただけである。

従来指摘されてきたように、下人が老婆の論理に触発されて盗みを働いたという流れは確かに存在している。しかし下人が報復律に従って盗んだのであれば、盗みそのものは二次的な目的ともなる。つまり、下人のその盗みはその場限りのものとなる。報復的な形式を欠いては盗みは成立しない。

「羅生門」は『今昔物語集』巻二十九第十八「羅城門登上層見死人盗人語」と巻三十一第三十一「太刀帯陣売魚傭語」に依っている。原拠との比較が重ねられてきたが、中でも巻二十九の盗人が、老婆の着物も抜かれた髪も女の着物もすべて奪い去るのに対して、「羅生門」の下人は老婆の着物だけを奪う。この矛盾点はよく指摘されている。若い女の髪や着物の方が金になるからである。

ところが下人は、ここで老婆の着物だけを奪ったように見えて、

実はほかのものを盗んでいる。それは老婆の論理である。下人は論理を採用したのではなく、あくまで盗んだのである。下人は老婆の論理で、老婆を支配しようとした。一般論ではなく、老婆が口にした報復律を奪ったのである。高橋龍夫は「老婆の言葉をもって論理という人工的な方法による自己存在の合理化、いわば言葉の有効性と欺瞞性を武器としての人間の自立がここでは問題なのではないだろうか」と述べている。⁽⁹⁾ それはしかし、「人間の自立」と関わりのない話である。盗む盗まれるという、もっと卑俗なやり取りがなされたのである。老婆が口にした報復律を盗みはしたが、下人はその論理を信じていない。例えば宮坂覺は、下人が「老婆の甘えの構造に支えられた状況倫理から生まれた悪の論理を、善悪の埒外で捉え己れの行動論理とした」と指摘しているが、下人は老婆の論理を己の行動論理となしてなどいない。⁽¹⁰⁾ そこには常に仮そめの空気が流れている。こうした論理に永続性はなく、その場その場で動くのである。

宮坂覺は、下人が「老婆に出会い〈行動論理〉を獲得し自らの人生、すなわち、自らの決断によって自らの生を背負うという生きかたに旅立つ」と要約している。⁽¹¹⁾ しかし下人は相手の論理を盗むが、論理は使い捨てにされるだけであり、その論理に縛られるわけではない。重要なのは、エゴイズムの隠れ蓑となっている論理を逆流させると、論理の「主人」はその波に支配され、論理の「下人」へ反転するという発見が、そこにはあったという事実である。論理の内

容は何でも構わない。一時的に、下人がその主人を支配できるといふところが、下人にとっては重要であつたのである。

本論考では、以上のような意味において、下人が「論理の盗人」になり、主人・下人という関係を逆転させるという視点から、下人の行動を分析し、それを描いた芥川の心理を再構築してみたいと思う。

二 エゴイズムの隠れ蓑としての論理

「羅生門」初出稿（『帝国文学』大正四年一月）において、下人の犯罪は次のように描かれている。

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとつた。それから、足にしがみつかうとする老婆を、手荒く屍骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を数へるばかりである。下人は、剥ぎとつた檜肌色の着物をわきにかへて、また、く間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

この場面について相沢毅彦は、下人が「老婆の（生）の（文脈）」がわからないまま、また、わからないが故に老婆を懲らしめるような形で老婆の着物を奪い、蹴倒すという行為ができた」と述べている¹²。確かに下人は老婆の生の文脈や、その言葉を十全に理解しているとはいえない。しかし下人は、老婆のエゴイズムについては、よく理解しているのではないだろうか。

また下人は老婆を傷つけていない。そうした配慮に、吉田彌生との結婚をフキに反対された芥川の、穏やかな復讐という心象の投影を見ておくことは無理ではない。龍之介を手中の宝のように考えていたフキには、龍之介をほかの女性に渡したくないという思いがあった。いずれ龍之介の結婚が避けられないとすると（芥川家の存続には結婚は必要である）、その相手は自分の都合のよい女性でなければならなかった。はつきり言つて、主人と下僕のような関係でなければ許せなかった。家の中の自分の支配的な位置を奪つてしまう女性を、龍之介の妻として迎えるわけにはいかない。英語が話せて英文学に精通した才女には、自分は太刀打ちができない。したがって吉田彌生は敵として排除するという、エゴイズムの論理がそこには働いていた。家柄や生まれが駄目、同年齢だから駄目といった論理は、フキにとつても、仮そめの理屈に過ぎない。龍之介をハイカラな才媛から奪還できればそれでよかったのである。

日置俊次は右のような視点から芥川の失恋事件に触れ、吉田彌生の優れて西洋的な教養から「龍之介のまなざしは若く美しい彌生にさらに注がれ、フキは旧時代の老女として取り残されてしまう」というフキの危機感を指摘している。そして若い龍之介は「すでに老いたように見えるフキの内部に「女」としての意地と嫉妬とを見出して驚いたのではあるまいか」と推測している¹³。指摘の通りであろう。フキのエゴイズムの隠れ蓑となつた彌生否定の「論理」によつて圧倒されてしまったショックを解消するために、芥川は「羅生

門」を書いたように見える。フキが並べ立てた論理は嘘の論理であり、隠れ蓑に過ぎないことを、芥川は見抜いていた。その論理を芥川が自身の論理とするはずはない。その代わり芥川は、自身の分身である下人が力よりも、論理を逆流させて老婆をやりこめる場面を描いた。例えば笹淵友一は、芥川が「その分身をして他者のエゴと格闘し、勝利を収めさせた。そういう意味で『羅生門』は芥川の挫折のしこりを芸術的方法によって解消し、カタルシスを実現しえたのである」と指摘している⁽¹⁾。しかし実際は、芥川は他者のエゴと戦ったのではなく、最も身近で身内である、母代わりのフキのエゴと戦って負けたのである。もし執筆にカタルシスがあったとしても、それもまた仮そのものであることを、芥川自身がよく知っていたと思われる。

フキが芥川に教えたのは、誰かが自分を正当化するために持ち出す論理の背後には、エゴイズムが存在するという事実である。芥川が吉田彌生をあきらめたのは、論理によって納得したからではない。親代わりのフキのエゴイズムが生み出した論理によって蹂躪されたからである。嫁は同年ではだめだ、年下でなければだめだと主張しても、世の中を見渡せば、その論理を無効化させる反例はいくらでもある。例えば「姉女房は身代の薬」「姉女房は倉建てる」などの諺もある。明治天皇の皇后も天皇より三歳年上であった。しかし、養子である龍之介に、フキのエゴイズムは手強かった。「イゴイズムをはなれた愛があるかどうか」「周囲は醜い 自己も醜い そし

てそれを目のあたりに見て生きるのは苦しい」という書簡（一九一五年三月九日付、井川恭宛）に見える龍之介の思い、「イゴイズムのない愛がないとすれば人の一生ほど苦しいものはない」という叫びは、一見すると無償の愛を求めているようにも読み取れるが、実はエゴイズムをはなれた論理が存在しないのだろうかという叫びだったのではあるまいか。そこには、論理が無償の存在ではなかったことへの、驚きがあったのである。

しかし一方で、エゴイズムと論理が節操もなく結びつくその醜さに、龍之介は盲を開かれたような気がしていた。「僕は霧をひらいて新しいものを見たやうな気がする。しかし不幸にしてその新しい国には醜い物ばかりであった。僕はその醜い物を祝福する」と書簡（同年三月二日付、井川恭宛）で語っているのは、そのような事情を指している。人を騙してもいいという論理を持ち出す人間は、騙されても文句を言えない。つまり、論理はそのエゴイズムを支配しうる。老女が、盗みを是認する論理を持ち出すとき、その論理を拝借すれば、老女から盗むことができる。それは老女の論理を盗み、同時に論理の背後に隠蔽されたエゴイズムを表に晒す行為である。その論理や思想をいちいち自分の糧や信条にする必要などない。

追剥や強盗を行う犯罪者は、被害者の事情など、身勝手に蹂躪してしまふ。しかし、相手の論理に従い、「目には目を」的な行動に出る行為は、ただの強盗ではない。相手からエゴイズムを盗み、相手のエゴイズムで対抗する。このような行為が、その最終段階で強

盗という形態をとるという流れを、下人は発見した。老婆との会話によって盗人が老婆の論理を盗んだように、下人は相手から身勝手な論理を導き出し、それを「盗む」ことによって生活できるかもしれない。それは下人にとって、餓死するか盗人になるかという二者択一に収まりきらない、新たな選択肢であったのではないだろうか。下人の迷いの中で良心というものが問題になっているのだとすれば、論理の盗人、エゴイズムの盗人には、視点を変えれば義賊的な側面もあり、相手の反論を抑え込むと同時に、良心の呵責はより少なくて済む。

三 太刀と面跑

「羅生門」の老婆が執拗に動物に喩えられている点は、しばしば指摘されてきた。「猿のやうな老婆」「丁度、鶏の脚のやうに、骨と皮ばかりの腕」「肉食鳥のやうな、鋭い眼」「その喉から、鴉の啼くやうな声が、喘ぎ喘ぎ、下人の耳へ伝はつて来た」とあるように、多く鳥類の比喩が使われる。⁽¹⁵⁾下人が老婆の前に姿を現す瞬間の描写は、初出稿では次のとおりである。

そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上った。さうして聖柄の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよつた。老婆が驚いたのは、云ふ迄もない。

このとき、「老婆は、一目下人を見ると、まるで弩にでも弾かれ

たやうに、飛び上った」という。跳躍力がある。「老婆が屍骸にまづきながら、慌てふためいて逃げようとする」「老婆は、それでも下人をつきのけて行かうとする」と続くのだが、とにかく老婆は逃げようとする。下人が老婆の存在を発見した時、恐怖と反感を感じたように、老婆にも自分が悪事を犯しているという自覚があり、捕えられて罰せられないように逃げだしたとする説明が可能である。しかし老婆の様子は、理屈ではなく、殺されかけた鶏が逃げだすときのような、動物的で自然な反応である。あるいはライオンに襲われた駝鳥がとにかく逃げだしたという動きに見える。「一人の男が、猫のやうに身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子を窺つてゐた」とあるように、下人は猫に喩えられるので、猫が小鳥を襲うという構図を考えてもよい。いずれにしても老婆は「驚き」によってあたふたする。下人にしてみれば、この「驚き」を与えたという点が一つの達成のような印象を生んでいる。老婆を取り押さえた下人は、「唯、或仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである」という状態になる。老婆を動物のように驚かせ、恐れさせたところに、まず下人の満足の理由があり、ここから現在の自分の空腹を何とかしようという算段へとはつながっていない。狩りを成功させた野獣は、獲物を食べ始めるであろう。しかし、「下人は、さつき迄自分が、盗人になる気でゐた事なぞは、とうに忘れてゐるのである」という。この振幅の激しさに疑問が残る。

下人には、とにかく食べたり飲んだりした形跡がない。そして空腹に苦しむ描写がない。これは、この作品のもたらす大きな謎である。羅生門の下で雨が止むのを待つ間、何も食べてはいないが、下人は平然としている。下人は「短い鬚の中に、赤く膿を持った面砲」があると描かれるが、この短い鬚はもともあったものなのか、この数日の状況で無精ひげになったのかもわからない。本当に切羽詰まった状態で空腹に苦しんでいるのなら、身だしなみを整えている余裕もなく、面砲を気にかけている暇すらなくなるはずである。

下人は「腰にさげた聖柄の太刀が鞘走らないやうに気をつけながら、藁草履をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた」というように、動くときは、必ず太刀を気にかけている。下人がいつも触れているのは面砲か太刀である。「太刀の柄を左の手でおさへ」「右の手では、赤く頬に膿を持った大きな面砲を気にしながら」と描かれるように、面砲と太刀に同時触れていることもある。面砲は下人の若さを示す特徴だが、「太刀」を持っている時点で、作品のリアリティは破綻している。日置俊次によれば、雑用係の下人が身分違いの太刀を持つことはあり得ないという。特に「聖柄の太刀」は非現実的な刀で、聖剣類の可能性もあり、能「羅生門」に現れる太刀の影響を指摘しながら、極めて象徴的な道具として機能していることを詳細に説明している¹⁶⁾。

しかし、下人が盗品のような刀を持っていて、それを使ったことがないという点が重要なのではないか。下人は富裕な家の雑用係で

あり、警固の武士でもなく、馬にも乗らず、戦場にもいかず、太刀を持つ機会はない。老婆の前でも、下人は刀を脅しに使ったのみである。太刀は小道具として心理的に効果を与えた。つまり、刀は実際に人を切らなくても、大きな働きをする。切るというイメージが、その力となっている。この太刀は、下人が盗んだ論理というものの象徴になっているのではないか。論理には実体がない。実際に人を切ったり、殺したりすることはない。しかし、心理的にはそれに似た働きをする。老婆は、いわば論理という刀で切られたのである。

下人が老婆の着物を奪ったことは、論理を強奪したあとの帰結に過ぎない。老婆は怪我もしていない。若い女の着物と髪がそこには残されており、老婆側のダメージはわずかである。もしダメージが残るとすれば、自分の論理を盗まれ、その論理で切られたという心理的な側面に関わってくるはずである。

論理を盗むという行為を無意識のうちに行ったのは、実は老婆の方が先である。老婆も論理の盗人なのである。魚売り女は生きるためなら多少のことは許されるという論理を持っていると老婆は主張する。髪を盗まれても女は自業自得であるという。女の論理を老婆は代弁するように盗んだ。その老婆の論理を、今度は下人が盗んだ。老婆が魚売り女の行為を是認する点について、笹淵友一はこの「是認は自己の死体損壊を弁護する手段にほかならない」と指摘している¹⁷⁾。その論理を投げ返して、下人は老婆に「許されている」はずだと迫る。そして下人は老婆の着物を奪って闇の中に走り去る。こう

した下人の盗みの方式は、一般の盗みとはずいぶん違った局面を見せている。無差別に人を傷つけて物品を奪うのではなく、まず相手のエゴイズムに満ちた言い分を聞く。その結果として盗みを働く。無暗に盗みを行使用するのではなく、切りつけるのでもない。ここでは象徴的な太刀の演出も用いつつ、基本的に心理戦が行われているのである。

下人には、これまで自分自身の世界と、自己の外にある世界を対立させたり、結び合わせる体験がなかったようである。勤務する家の命令の通り動いて、そして生活してただけであろう。しかし、下人は突然、一人で外の世界にはっぱり出されてしまった。治安も悪く、末法の世のような荒れ果てた世界と交渉を持たずに、餓死するという選択肢もあった。しかし、下人は世界と交渉することを選んだ。すなわち、論理とエゴイズムを盗むことで、世界と切り結ぶ可能性、世界と一方的ではない交渉をもつ可能性、あるいはその結果、世界と命のやりとりをする可能性すらも得た。論理の盗人として、ややこしいプロセスを経るにしても、結果的に、下人は生活していくための糧を得ることができる。それはある意味で紳士的な強盗、命を奪うことは避けようとする強盗である。例えば同じ古典に材をとった「藪の中」の多襄丸にその紳士的な傾向があった。彼は人を殺さないほうが良いという考えの持ち主で、相手の欲望やエゴイズムを利用して誘導し、騙し、木に縛り付ける方式を用いていた。太刀と弓を取り換えたり、野蛮な強盗というより頭腦的な詐欺師で

ある。欲望のないものは、詐欺師の罠にははまらないだろう。

いずれにしても、論理を盗んで生きていく可能性という発見が下人にもたらされたのである。その論理は、下人の内面とはかわりを持たない。下人にとって、論理も太刀も、いつてみれば飾り物に過ぎない。しかし恐るべき力を秘めている。あるいは面砲もそうである。大した存在ではない面砲だが、下人の右手はずっと支配されている。こうした下人の論理強奪の心理的プロセスは、作者においても重要な意味を持った。芥川にもそうして、自分の傷ついた心を支えていこうと考えた時期があったのではなかったか。例えば『今昔物語集』の枠組みを下人のように盗んで、現代に投げ返すという発想が、苦しみの底から生まれてきたものではなかったか。もちろんそれは、『今昔物語集』の論理を自分の行動原理とするという発想からは遠い話であったのである。

四 二項対立からの解放

老婆の論理の出発点は、死人の髪を抜く行為が悪であると自ら認めたところにある。初出稿では「成程、死人の髪の毛を抜くと云ふ事は悪い事かも知れぬ。しかし、かう云ふ死人の多くは、皆、その位な事を、されてもいゝ人間ばかりである」と老婆は言う。

まず順番として、老婆の話に現れる、蛇を太刀帯の陣へ売りに行ったという若い女の行為を考えてみよう。

現に、自分が今、髪を抜いた女などは、蛇を四寸ばかりづつに切つて干したのを、干魚だと云つて、太刀帯の陣へ売りに行つた。疫病にかゝつて死ななかつたなら、今でも売りに行つてゐたかもしれない。しかも、この女の売る干魚は、味がよいと云ふので、太刀帯たちが、欠かさず薬料に買つてゐたのである。

自分は、この女のした事が悪いとは思はない。

つまり女は蛇を魚と偽つて売つたが、味が良いので皆が喜んで買つていたという。

「羊頭を懸けて狗肉を売る」という諺がある。「牛首を懸けて馬肉を売る」「羊頭を懸けて馬肉を売る」などのバリエーションの存在が示している通り、こういう例は現代でも散見する。犬肉や馬肉を売ること自体は、犯罪ではない。また、偽つてはいなくても、実際は店側と顧客のイメージがずれていることも多い。⁽¹⁸⁾ 蛇を売る行為そのものは、問題にはならない。「地獄変」では、良秀の弟子が蛇に噛まれかける恐ろしい場面が描かれているが、毒蛇の存在もあつて蛇は嫌われやすい。しかし、蛇を食べることに当時の人々はそれほど抵抗感がなかつたはずである。当時は市場などでも売つていたのではない。例えば沖縄の伝統料理には、海蛇を使うイラブー汁⁽¹⁹⁾がある。専門的なサイトには、次のような記述がある。

中国の広東省や広西チワン族自治区では、毒蛇を含む蛇の料理を伝統的に食べている他、近年は他の省でも料理を出す店が増えている。有名なのは蛇スープで、あっさりとした美味な味

とタンパク質などの栄養分で珍重される。(中略) 日本にも、蛇飯を炊いて食べる地域がある。

蛇飯と言えば、夏目漱石『吾輩は猫である』第六章に、迷亭の蛇飯の話が載っている。越後の国の蛸壺峠の話だという。鍋の蓋には多くの穴が開いている。

「爺さんはやがて左手に鍋の蓋をとつて、右手に例の塊まつた長い奴を無雑作につかまへて、いきなり鍋の中へ放り込んで、すぐ上から蓋をしたが、流石の僕も其の時許りははつと鼻の穴が塞つたかと思つたよ」(中略)「すると一分立つか立たないうちに蓋の穴から鎌首がひよいと一つ出ましたのには驚ろきましたよ。やあ出たなと思ふと、隣の穴からも亦ひよいと顔を出した。又出たよと云ふうち、あちらからも出る。こちらからも出る。とう／＼鍋中蛇の面だらけになつて仕舞つた」「なんで、そんなに首を出すんだい」「鍋の中が熱いから、苦しまぎれに這ひ出さうとするのさ。やがて爺さんは、もうよからう、引つ張らつしとか何とか云うと、婆さんはあーと答へる、娘はあゝと挨拶をして、名々に蛇の頭を持つてぐいと引く。肉は鍋の中に残るが、骨だけは奇麗に離れて、頭を引くと共に長いのが面白い様に抜け出してくる」「蛇の骨抜きですね」と寒月君が笑ひながら聞くと「全くの事骨抜だ、器用な事をやるぢやないか。夫から蓋を取つて、杓子でもつて飯と肉を矢鱈に掻き交ぜて、さあ召し上がれと来た」「食つたのかい」と主人が冷淡に

尋ねると、細君は苦い顔をして「もう廃しになさいよ、胸が悪
るくつて御飯も何もたべられやしない」と愚痴をこぼす。「奥
さんは蛇飯を召し上がらんから、そんな事を仰しやるが、まあ
一遍たべてご覧なさい、あの味許りは生涯忘れられませんぜ」

この小説を芥川は確実に読んでいたはずである。蛇の骨抜き的情
景は、芥川の「鼻」において、お盆の穴に鼻を通して鼻を茹でると、
毛穴から脂が出て、鳥の羽根の茎のような形で抜けるというイメー
ジに影響を与えているかもしれない。なお原典の『今昔物語集』『宇
治拾遺物語』では、脂は虫に例えられている。

また、先のサイトには、ヘビ類の研究を行う日本蛇族学術研究所
の所長、鳥羽通久の言葉として、次のように引用されている。

確かに、現在の日本ではヘビを食べる習慣はほとんどありま
せんね。しかし、江戸時代のころは、日本でもマムシやシマヘ
ビなどはよく食べられていたんですよ。当時の人々は、牛など
を食べることはありませんでしたからね。ヘビは貴重なタンパ
ク源のひとつとして重宝されていたんです。また、ヘビは食べ
られる動物のなかでも、比較的簡単に捕まえることができるも
のでしたから、特に山あいの地域ではわりと頻繁に食べられて
いたようです。

言うまでもなく京都は東山、北山、西山という山に囲まれた地域
で、蛇がいる。別の例をあげよう。群馬県太田市藪塚のジャパン・
スネークセンターは蛇の研究所である。シマヘビの葱塩炒めやマム

シの踊り食いなどの、蛇料理を食べることができる。利用者の感想
をサイトで調べると、味は鶏肉に似ているという指摘が多い。もう
ひとつ、台湾の例を挙げよう。台北では万華地区の「金代山産藥膳
坊」という店で蛇肉スープなどを味わえる。また高雄では、六合夜
市の「今日蛇園」が有名である。蛇スープや蛇の炒め物などメ
ニューはすべて蛇である。蛇には、精力増強の効果があるとされ、
現代日本でも、まむしドリンクやまむし酒が滋養強壮剤として珍重
されている。漢方薬という観点から見ると、例えばある漢方薬会社
の月刊誌に、マムシ（ハンピ）に関する次の記事が載っている。²⁰

日本では、反鼻の黒焼きを配合した有名な処方「伯州散」が
あります。反鼻、津蟹、鹿角を別々に黒焼きにし、細末にした
ものを等量混和したもので、慢性の化膿性のはれもの、切り傷
などに内服されます。また、民間的にはマムシの全ての部位が
利用されています。強壮、興奮薬として疲労時や冷え症などに
粉末または黒焼きを内服したり、焼いて食べたり、マムシを漬
け込んだ「マムシ酒」を飲んだりします。

芥川の初出稿では「太刀帯たちが、欠かさず薬料に買つてゐた」
となっている。後に、典拠の『今昔物語集』にあるとおり「薬料」
に書き直される。原典では、老婆が売りに来たものを、武士たちが
その炊事係に買わせて料理させ、それを喜んで食べていたという
形になっている。自分では買っていない。しかし芥川の文章では、
武士たちに直接売りに行っている様子である。武士たちがいそいそ

と晩のおかずを買うというのも奇妙である。ここに生まれるイメージは、現代の男性がまむしドリンクを買うように、精力がつく「薬料」だといって武士たちが群がっている情景である。しかも若い女が売っている。「太刀帯」という言葉が、ここではあきらかに性的暗示となっている。実際に、芥川は失恋の痛手を癒すために、吉原に通っている。花街では業界界の精力剤などが流通しており、芥川が蛇酒のようなものに出会った可能性もある。あの迷亭も「蛇飯はのぼせるからね」と告白していた。武士たちは、それが蛇であるということを明確には知らなかったのかもしれないが、味が良いと言って喜んで買ったというのは、精力がつく薬料のようなものだという意味を隠語で述べたものである。食べると「のぼせる」というのであろう。北京の専門店で蛇の血を飲んだ日本人男性の証言を聞いたことがあるが、動悸がして一晩眠れなかったそうである。そうした報告はインターネット上でもたくさん見つかる。

台湾には医食同源の考えが根付いている。薬膳という発想があり、もともと食材と薬料を区別しない。蛇料理にも滋養強壯の意味合いがあり、台湾の読者なら蛇を食べるといえば、間違いなく精力剤だと考える。あるいは、近年に禁止されるまで、台湾には檳榔という麻薬にも近いものを、下着姿の若い娘たちが肌を露出させて男たちに売る店があった。飛ぶように売れるのである。蛇売りの若い娘に男たちが群がる光景には、同じようなニュアンスを感じ取るかもしれない。この蛇売り女の行為を許されると断じ、自分も許されると

主張するところが、老婆の論理の出発点となっている。しかし老婆が髪を抜く行為には、一方で性を売り物にする若い女を罰しようとする底意も見えている。それはやはり、若さへの嫉妬によるものなのではないだろうか。

次に、そもそも死体の髪を抜くことは絶対悪なのか、考察を深めてみようと思う。

すると、老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めてゐた屍骸の首に両手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の虱をとるやうに、その長い髪の毛を一本づ、抜きはじめた。髪は手に従つて抜けるらしい。

右は下人の見た老婆の姿であるが、非常に丁寧に、むしろ愛情をもって女の髪を抜いているように見える。もちろん死体を冒瀆するのは許される行為ではないが、それは平和な時代の話である。無法のはびこる時代の混乱の中で、毎日野たれ死にする者がおり、死体が遺棄されて腐敗が進む。ごみのように捨てられた死体の髪を抜いても、窃盗になるとは思えない。「鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄みに来るのである」と描かれているように、羅生門の上層は多くの鴉が出入りする。そこに死体を捨てるのは、つまり鳥葬である。老婆が鴉に喩えられているので、老婆もそうした鳥葬の鳥であるという印象が生まれる。ある意味で、老婆の行為は弔いに近いといえる。

上田信は、チベットの鳥葬（天葬）について述べる中で、「死体

は古着と同じ」という言葉を引用し、「古着が他の人の手に渡って役立てられるように、死体が鳥のエサとなり、その血肉となってくれば、それが嬉しいのだ」と指摘している。⁽²¹⁾ もし髪を古着と捉えれば、老婆が髪を再利用するのであり、それは必ずしも悪いことではない。また、死体をどうするかという枠組みを持つ古典落語「らくだ」の中では、屑屋が死体の頭部を剃髪する。上田信は、これを屑屋が「司祭者として死体を浄化した」と捉えている。⁽²²⁾ 老婆が女の髪を抜くことは剃髪の儀式とも見え、絶対悪とは言い切れない。西欧の例を挙げると、イギリスのヴィクトリア朝時代には、死者の毛髪を装飾品にアレンジすることが流行り、毛髪細工は芸術品の域に達したという。「裕福な上流社会の葬儀では髪の手を使った装身具が会葬者に配られることもあった」という。⁽²³⁾

台湾には、冥婚という習俗がある。単純化して解説するが、道に赤い封筒が落ちていた。これは「紅包袋」と呼ばれ、お祝い金を入れる封筒である。お金が入っていると思ってこれを拾うと、そのひとが冥婚の、つまり死者の結婚相手の候補者となる。死者がその人を相手に選んだとみなされるのである。これは息子や娘が未婚のまま死んでしまうと成仏できないので、魂が地上にあるうちに結婚させて、あの世で幸せにしてあげたいという、父母や遺族の願いによる風習である。候補者は死者と結婚式をあげる。一度赤い封筒を拾ったら冥婚に応えたとみなされるので、捨ててももう遅い。遺族が物陰から必ずその封筒を見張っている。冥婚の紅包袋には、若く

して亡くなった人の写真や、毛髪、爪などが入っている。遺体の一部だが、これは遺体の損壊とはみなされず罪にもならない。記念のため、あるいは供養のために髪を抜くことは許されている。つまり、髪を抜くことは絶対悪ではない。心理的な問題であり、その目的や死者への思いが、その行為の意味を決めるのである。

もし老婆が最初から、腐っていく死体の髪を抜いて何が悪い、私は死者の知人であり、死者の供養のために髪をもらうのだと開き直れば、下人が反論する余地はほとんどなかった。そこは死体がカラスにつつかれ、白骨化する滅びの空間である。もちろんネズミもいるに違いない。しかし老婆は、魚売りの女がしたことは悪であるが、自分が同じような悪を行っても、若い女はそれを許すはずであるという論理を構築した。ここにはすでに、老婆の行為が悪かどうかという二項対立的な議論は存在しない。死体の若い女が老婆を許すかどうかという問題がまず提示され、自分は許されると老婆は結論付ける。この自己中心的な論理構造が、老婆が被害者となっても許さざるを得ないという論理を派生させる。つまり、老婆は着物を盗まなくても許すという拘束が生じる。これは下人のひらめきともいえるが、毛髪をとられた被害者が遺棄死体で、被害者そのものが実は不在であるという条件を、下人はうまく消去して、論理を操作した。このときの下人の心理は、次の描写に現れている。

しかし、之を聞いてゐる中に、下人の心には、或勇氣が生まれて来た。それは、さつき、門の下でこの男に欠けてゐた勇氣

である。さうして、又さつき、この門の上へ上つて、この老婆を捕へた時の勇氣とは、全然、反対な方向に動かうとする勇氣である。下人は、餓死をするか盗人になるかに迷はなかつたばかりではない。その時のこの男の心もちから云へば、餓死などと云ふ事は、殆、考へる事さへ出来ない程、意識の外に追ひ出されてゐた。

下人は「餓死をするか盗人になるか」に悩んでいた。しかし、ここで下人は、ある種のひらめきに対する高揚感に包まれている。それは勇氣という言葉で表現されている。下人は盗人になるとは言っていない。それは二項対立の問題ではなかつたことがはっきりしたからである。盗人という部分にはさまざまな可能性が隠されていた。例えば人を殺してすべてを奪ひ取る強盗と、人を傷つけずに金だけを奪う窃盗には、大きな違いがある。自業自得や義賊の論理がそこに働くかどうかという点も大きい。下人は、論理を盗むことから始めて、しかもその論理を操作する勇氣を持ったのである。その帰結として物を奪うという発想を得た。ほぼ無数といえる盗みの形が存在する中から、下人は自分のスタイルを選び取つたのである。論理から浮かび上がらせたエゴイズムによって、被害者に強奪を許可させる。いわば他者がこしらえた枠組みの中で勝負するわけだが、そこには平安朝末期の人間の欲望の描写を基本にして、論理を操作しつつそこに自分の思いを重ねるという自身の創作スタイルを見出した、芥川の文学的出発にもかかわる発想の土壌があつたのである。

五 論理の「主人」が「下人」となる

論理を盗んで、背後にあるエゴイズムを照らし出す盗みの方法は、「因果応報」といつてもよいが、ある種のバランスによって成り立つ。十円の盗みをしたものから千円を盗んでいいわけではない。老婆がしたことは、遺棄死体から髪を抜くという曖昧な行為であり、生者の被害者はいない。もし老婆に罪があるとしても、そのほろほろの着物をもつて弁済できる程度の罪である。老婆としては、それ以上の苦痛は免除されていい。しかし、こうしたバランス感覚を、プロの盗人は持つべきではない。収入が減つてしまふからである。⁽²⁴⁾

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとつた。それから、足にしがみつかうとする老婆を、手荒く屍骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を数へるばかりである。下人は、剥ぎとつた檜肌色の着物をわきにか、へて、また、く間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

右が下人の「盗み」の場面である。老婆の着物の奪取は、論理を盗んだことを確認する行為に他ならない。着物自体には価値がないが、老婆に反論できないことを認めさせるといふ目的を達するためになされたように見える。芥川の分身としての下人を考えると、老婆はやはりフキと重なる部分がある。老婆を圧倒する下人を描く芥川の目的は、自分を支配しようとするフキにそのエゴイズムを逆流させて、懲らしめることにあつた。ただし物語の中でさえ、フキを

本当に傷ついたり殺したりする必要は感じなかった。論理によって、相手の鼻柱をへし折れば、それでよかったのである。⁽²⁵⁾その後、下人は実に素早く逃げている。本来なら、そんなに急ぐ必要があるだろうか。おそらく使い捨ての論理の拘束力が一時的なものであることを、下人は知っていたのではないか。

老婆の論理は、老婆が口にしたものであるゆえに、老婆に帰ってくる。もし品行方正に生きている人間がいたら、その同じ論理を適用しても意味はない。その者から何かを盗もうとするのであれば、まず、その者から自己弁護の論理を盗まなければならない。盗んだ論理を相手に投げ返して盗みが成立する。もし、最後に羅生門を駆け下りた下人が、この「ブーメラン効果」を応用できる次の相手にあてがあるとすれば、たった一人しかない。つまり、当面の下人の行先はひとつしかないのである。

ふだんなら、勿論、主人の家へ帰る可き筈である。所がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたやうに、当時京都の町は一通りならず衰微してゐた。今この下人が、永年、使はれていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。

下人が京都の外から来たのか、京都の町に暮らしていたのかという議論がある。普段なら帰るべき家が、京都の町の衰微の影響を受けて今日は帰れないというのだから、主人の家が京都の町にあることが分かる。現在、下人が「ブーメラン効果」を適用できる人間は、

下人を解雇した家の主人である。

数日前、こういう不景気な世の中なので解雇すると、主人は下人に言った。そのために下人は飢え死にする恐怖を味わった。不景気という同じ理由によって主人に盗みを働くことができる。しかも大きな盗みをするができる。初出稿の末尾では「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつゝ、あった」とあり、急いだ感覚から、その盗みの場所が下人の脳裏に浮かんできたことが推測できる。語り手は具体的に触れてはいないが、下人の勢いは、明確な行き先が意識されていることを暗示しているのである。⁽²⁶⁾

主人の家には警護もいるであろう。盗みは命を懸けたやり取りになる可能性もある。しかし下人に、その覚悟ができているかどうかは、不明である。なぜなら、警護人も人減らしされているであろうし、その家のどこに何がおいてあって、どこが弱点であるか、誰がどこで寝ているのか、下人は知り尽くしているからである。闇に紛れ込んで食料や衣類を持ち去るのは容易であろう。この末尾の時点では、下人には、徹頭徹尾盗人として行動するような、突き抜けた開き直りのようなものがまだ生まれていないと思われる。自分の犯罪に対する良心の痛みを緩和するために「ブーメラン効果」を用いなければ強盗ができないようでは、強盗としてはいつまでも未熟なままということにもなるだろう。

当面、主人から家財などを盗むことができる。しかしその後を考えると、いつでも無尽蔵に論理が盗み続けられるかどうか、不安が

残る。これはある意味では、そのちの芥川の創作に関する不安にも重なっていくように見える。つまり『今昔物語集』の枠組みだけでも、創作の財はたくさんあるように見える。しかしそれで、作家としていつまで勝負できるのかはわからない。⁽²⁷⁾さらに先の話ではあるが、典拠を切支丹関係に広げても、不安は残るであろう。

決定稿末尾は、「下人の行方は、誰も知らない」と書き換えられる。⁽²⁸⁾このあと下人が盗みをしたのかどうかさえ、曖昧である。しかし、作品の現在においては、下人の最初の行く先は、つまり京都市中において犯罪を犯す場所は、定まっている。なぜなら下人が本格的に主人を襲うことで、初めて下人は下人ではなくなるからである。⁽²⁹⁾

下人にとって、人生の敵の本丸はそこにあるという認識が、末尾ではつきり生まれていると思われる。あるいはその末尾が、芥川自身にとって真の敵であるべき存在について、発見をもたらししたとも考えられる。フキに擬した老婆を論破しても、実は何も変化しない。

その背後にもっと大きな「家」という制度があり、その「家」の「下人」のままでいるのかどうか、必然的に問われているのである。結論から言えば、フキの支配も、家の支配も、ついに脱しきれなかった芥川であるが、しかし「羅生門」を執筆した時期にその問題に突き当たり、深く悩んでいたことは確かである。恐らくそういう社会的な制度と深く交錯する形で、日置俊次の指摘する「女の力」が作用していることにも、芥川は気づいていた。⁽³⁰⁾

「羅生門」決定稿で、下人の行く先をあえてうやむやにした語り

手は、このとき、下人を善でも悪でもない闇の中にかくまったのである。ある意味で、語り手は下人の全き共犯者となったのである。芥川にとって、それはどうしても突き抜けていくことができない自分自身を認識し、しかしそれでも未来の可能性を失うことはせず、まだまだ迷い続ける自身の姿を覆い隠す行為でもあったものではあるまいか。⁽³¹⁾

(注)

(1) 吉田精一『芥川龍之介』(新潮社、一九五八年一月)六二頁。原著は『芥川龍之介』(三省堂、一九四二年二月)。

(2) 三好行雄『芥川龍之介論』(筑摩書房、一九七六年九月)七〇頁。

(3) 浅野洋「小説家たちの起源Ⅲ 芥川龍之介——「羅生門」再読」、「渾沌」近畿大学大学院文芸学研究科、二〇一二年三月。

(4) 小谷瑛輔『小説とは何か?——芥川龍之介を読む』ひつじ書房、二〇一七年一二月)三七頁。また、笹淵友一は「稚拙ともいふべき構想の不自然」を指摘している(「芥川龍之介」『羅生門』新釈、「山梨英和短期大学創立十五周年記念国文学論集」一九八一年一〇月、引用は『群像日本の作家11芥川龍之介』小学館、一九九一年四月)。

- (5) 須田千里「羅生門で語られたこと」(「奈良女子大学文学部研究年報」一九九四年一二月)。
- (6) 水洞幸夫「芥川龍之介「羅生門」論——下人が盗みをする理由」(「金沢大学国語国文」二〇〇九年三月)。
- (7) 付自文「芥川龍之介「羅生門」論——下人の内面性について」(「札幌大学女子短期大学部紀要」二〇一九年三月)。
- (8) 関口安義「芥川龍之介 実像と虚像」(洋々社、一九八八年一月) 四八頁。
- (9) 高橋龍夫「『羅生門』論——感性から論理へ」(「日本語と日本文学」筑波大学国語国文学会、一九九六年八月)。
- (10) 宮坂覺「芥川龍之介——人と作品」(翰林書房、一九九八年四月) 七三〜七四頁。
- (11) 宮坂覺「『杜子春』論——〈揺らぐ〉仙人の言説・消された末尾の数行」(佐藤泰正編『芥川龍之介を読む』笠間書院、二〇〇三年五月)。例えば木村一信も、下人が老婆の「論理を知ること、自己の座標を決定していった」と述べている(木村一信他編『作品と資料 芥川龍之介』双文社出版、一九八四年三月、一九七頁)。
- (12) 相沢毅彦「羅生門」という世界観認識」(「日本文学」二〇一六年四月)。
- (13) 日置俊次「芥川龍之介「羅生門」論」(「青山語文」二〇〇五年三月)。また田村修一「芥川龍之介 青春の軌跡——イゴイズムをはなれた愛」(晃洋書房、二〇〇三年一〇月、二七頁)は、「大人のエゴイズムの象徴である醜い老婆は、自分の論理を逆手に取られ、芥川の傀儡である下人によってエゴイズムの着物をひっぱがされ、裸にされたうえに手荒く蹴倒されてしまうのである」と指摘している。
- (14) 笹淵友一「芥川龍之介「羅生門」新釈」(前掲)。
- (15) 例えば中村良衛「下人という可能性——『羅生門』私論」(「日本文学」一九九三年六月)は「鴉と老婆は、ともに舞台となる京の社会のもう一つの極を形成している」と指摘する。
- (16) 日置俊次「芥川龍之介「羅生門」論——下人の太刀について」(「青山語文」二〇一八年三月)。
- (17) 笹淵友一「芥川龍之介「羅生門」新釈」(前掲)。
- (18) ほんの一例に過ぎないが、牛タン料理は仙台の名物とされるものの、大半の店はアメリカ産を使用しているといい、北海道名物のジンギスカン専門店も、多くの店はニュージーランド産など輸入肉を使用するという。
- (19) インターネットサイト「知識連鎖」の記事「蛇肉を食べるとどんな味? 食用としての蛇 ヘビの豆知識3」を参照。
- (20) 「生薬の玉手箱 反鼻(ハンピ)」(「ウチダの和漢薬情報」、二〇一〇年二月)。例えば昔から日本や台湾の家庭で親しまれている「養命酒」にはママシ(反鼻)が用いられている。なお「サイエンスニュース」のサイトにある「『食べる科学実験』へ

どは本当に効くのか？ 精力ムキムキ伝説を調査（後編）」（二〇一六年四月一九日更新）の記事によると、結核の特効薬としてはマムシよりシマヘビが用いられたという。この記事は、明治創業の蛇問屋で蛇を食べ、実際に滋養強壮に効果があったという実験報告となっている。

(21) 上田信『死体は誰のものか——比較文化史の視点から』（ちくま新書、二〇一九年五月）一〇五―一〇六頁。

(22) 上田信、前掲書一八九頁。

(23) サラ・マレー『死者を弔うということ 世界の各地に葬送の形を訪ねる』（柳野みさと訳、草思社、二〇一四年六月）二八六頁。

(24) 前田角藏「『羅生門』論——老婆の視座から」（『日本文学』一九九六年二月）は「うす汚れた老婆の着物を剥ぎとっていったところで売れる見込みなどあろうはずがな」と断じている。篠崎美生子「排除する物語／排除された物語——もうひとつの『羅生門』」（『国文学研究』早稲田大学国文学会、一九九七年一〇月）も、「この『引剥ぎ』はあとに来るべき『売る』という行為にうまく結びついていかない」と述べる。また「髪の毛にしろ着物にしろ、京都の町にとっても死人自身にとっても不用なものであるから、『冒瀆』という観念を抜きにして考えれば、老婆の行為は『盗み』にはならないだろう」と述べている。

(25) 三好行雄は、「悪が悪の名において悪を許す」ことを許容す

る世界が現前したとして「倫理の終焉する場所である」と指摘する（前掲書六四頁）。しかし、下人たちが倫理から自由になっているとはいえない。エゴイズムの隠れ蓑となる論理の射程が個人的で限定的であるゆえに、下人が論理を盗んで投げ返すことが可能になるが、そこにも倫理が働いている。

(26) 石割透『芥川龍之介 初期作品の展開』（有精堂、一九八五年二月、八六頁）は、初出稿末尾が「芥川家を前に敗北し続けた作者の、作品内部に限定された場でのみ解放された怨念の噴出」であると述べる。また石原千秋「テクスト論は何を変えするか——『羅生門』」（『国文学』一九九六年四月）は、「京都の町の外から羅生門を経て内へ入ろうとする力」を指摘し、「なぜなら、下人を京都の町の論理に対するストレンジャーに仕立て上げなければならなかったからである。食うに困れば悪事は当然——老婆が示した論理はまさに京都の論理ではなかったか」と述べ、下人は京都の外からやってきたと断じているが、下人が京都の町で働いていて解雇されたことが本文から解る。また老婆の論理は京都の論理ではない。

(27) 例えば三好行雄は、芥川が「『羅生門』や『芋粥』で自己の方法をはじめて手に入れたとき、同時に、その最初の輝かしい成功作は、方法の可能性の底をほとんど浚ってしまっていた」と述べている（前掲書九四頁）。また堀辰雄は一九二九年の東大国文科卒業論文「芥川龍之介論」で「彼は遂に彼固有の傑作

を持たなかつたと断言してよい」と述べている。

(28) 『新興文藝叢書第八編 鼻』(春陽堂、一九一八年七月) 所収本文。池上貴子「『羅生門』論——末尾改稿を軸に」(『日本文学研究』梅光学院大学日本文学会、二〇〇四年一月)は「『誰も知らない』とは、どんな未来を描くこともできなくなった作家の声ならぬ声」であり、「芥川は深い肉声を響かせた」と指摘する。また海老井英次「『羅生門』の読み難さ——その構造と作者の係わり」(佐藤泰正編『芥川龍之介を読む』前掲)は、決定稿で「『下人』は『人』の粹を脱して『我鬼』と言われる『鬼』の領域に入ってしまった」とするが、やはり鬼ではなく人のままであると考えられる。あの「藪の中」では、犯罪者として冷酷に突き抜けていかない多襄丸の描写が見られる。黄郁婷「芥川龍之介『藪の中』論——繁体字文化圏からの照射」(『青山学院大学文学部紀要』二〇二〇年三月)は「藪の中」と「羅生門」を比較し、「ともに下人について、あるいは事件の真相について、『誰も知らない』という闇の存在が余韻として響く」と指摘する。

(29) 下人という言葉は曖昧である。黄郁婷「芥川龍之介『羅生門』の受容について——『繁体字文化圏』からの照射」(『青山学院大学文学部紀要』二〇一九年三月)は、「羅生門」の中国語翻訳において、繁体字・簡体字を含めて「下人」の訳語には「家將」「傭工」「下人」などの多くの語が当てられ、護衛の武士、

やとわれ人、使用人のようにさまざまなニュアンスの変化があることを指摘する。それは原文の曖昧さに由来している。なお「繁体字文化圏」についてはこの論文で定義しているが、繁体字を用いる台湾を中心とした中国語文化圏のことである。中国語の簡体字と繁体字の間に断絶があることを、ほとんどの日本人は理解していない。

(30) 日置俊次「芥川龍之介『藪の中』論——竹に隠された秘密」(『青山学院大学文学部紀要』二〇二〇年三月)は芥川における持続するテーマとして「女の力」があると指摘している。日置は「女の底知れない力の前に、男がいかに無様で軽薄で無力であるか」と述べているが、確かに芥川のフキへの対応や、決定稿末尾には、最初からそうした敗北意識が付きまといっているように見える。

(31) 本論考は二〇二〇年三月に「日本近代文学」に投稿したが、理由も付されず不採用の連絡を受け取った論文である。一部加筆した。「青山学院大学文学部紀要」への掲載を推薦してくださいと日置俊次教授に心から感謝申し上げる。教授には細かい日本語チェックもお願いしている。